

地域コミュニティにおける
社会人のキャリア形成を支援する学校の開発と実装
-北海道・東川町でのフォルケホイスコーレモデルの実践と評価-

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科

(東川町役場 地域おこし研究員)

修士2年 遠又 香

フォルケホイスコーレの実践者としての研究

フォルケホイスコーレを実践している実践者という立場を生かして研究を行った。



- **北海道・東川町にて、フォルケホイスコーレをモデルとした大人の学校**
『School for Life Compath』を創業&運営
- 2020年に創業し、2021年から大学院に通いながら、実践と研究を3年間並行して行ってきました
- **東川町役場からも実績が認められ、**
今年の4月からは公設民営で校舎をオープンします

研究の焦点である「フォルケホイスコーレ」とは？

デンマーク発祥の180年以上続く大人の全寮制の学校。
長い人生の中で、半年から1年、暮らしながら自分と社会について考える。



大人のための人生の学校

対話と省察の学校

Become yourselfな学校
(自分自身になる)

「誰かとつながりながら、自分の人生について楽しく向き合える場所」

普段の生活から離れて自由な自分に変身する。授業や共同生活を通していろんなことに挑戦してみる。その中で思ったことを他の参加者と対話しながら省察する。そこからまた新たな世界が広がり、人生が始まる。そんな情景がフォルケホイスコーレには広がっていた。



普段の生活から
離れた自由な空間で
(試験も評価もない)



とにかく自由に
色々試してみる
(体験と実験が合言葉)



誰かと一緒に
対話をしながら
(集団での省察)



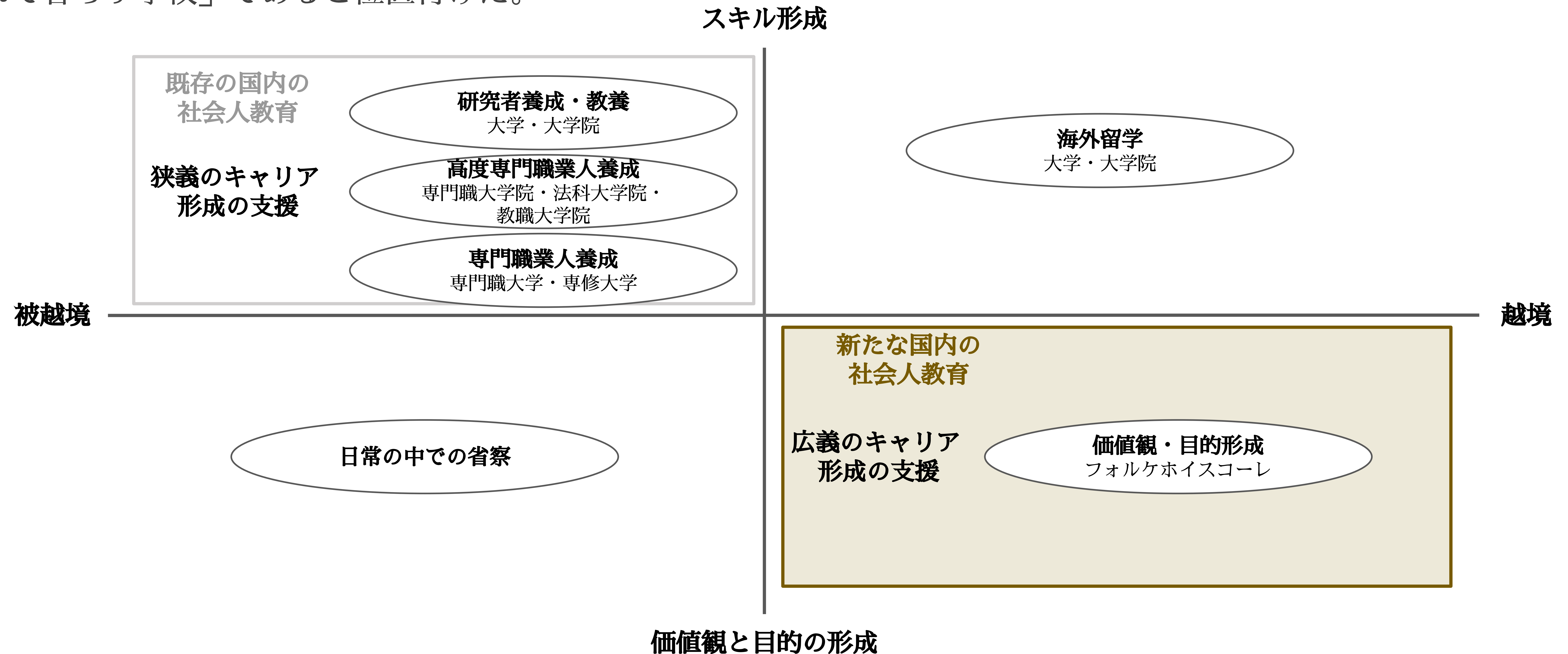
自分の世界を
広げ、社会を再定義
(視点が変われば
世界は変わる)

「こんな大人の学校が日本にも欲しい。」
デンマークで湧いたこの衝動が、私の研究の原点である。

研究背景と目的

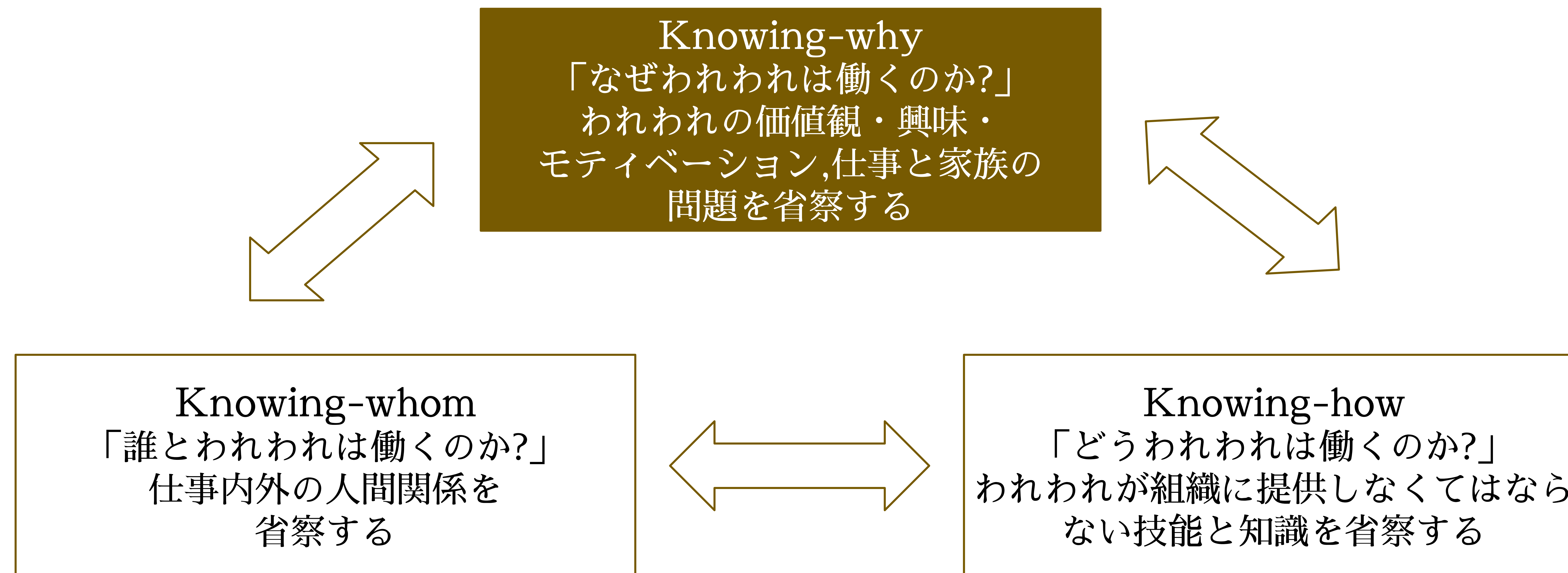
日本の社会人教育におけるフォルクハイスクーレの位置付け

本研究ではフォルクハイスクーレを社会人教育の一部として位置付け、学習目的(縦軸)と学習環境(横軸)の2軸で類型した。その中で、フォルクハイスクーレは「自己の価値観と目的の形成する」目的の学校であり、学習環境としては「普段の環境から離れて暮らす学校」と位置付けた。



現代社会において価値観と目的の形成が必要な理由

人が働き続ける上で、「なぜ働くのか?」「どう働くのか?」「誰と働くのか?」という3つの視点を「**省察**」することが大事だと指摘されている。**その中でも人生を生きる上での軸となる「なぜ働くのか?そもそもどう自分は生きたいのか?」を問い直す場所**、それが、フォルケホイスコーレと位置付けた。



インテリジェント・キャリア理論

(Parker, Khapova, and Arthur, 2007)

現代社会における省察をすることの意味

米国の哲学者であるSchön (1983)は、複雑な現実の世界では省察¹が不可欠だと指摘している。複雑な現実社会においては、キャリアの形成における唯一無二の答えは存在しない。個々人が現実社会と向き合いながら、その状況を省察し、自分にとって望ましい生き方や達成したい目的を定義し、それに基づいて必要なスキルを獲得することが重要である。

これまでの社会



「経済成長という共通の目的があった時代」
 偏差値の高い大学に入って、給与の高い会社に入る事が社会人の目標。
 終身雇用制だし一生安泰。

これからの社会



「変化の激しい複雑な時代に突入」
 今までの考え方やスキルでは解決できない時は、あえて立ち止まって、自分のキャリア自体を問い直す必要がある。

¹ 省察: 「実践の中での経験を探求し、その経験から意味を導き出し、新たな行動や解決策を生み出す過程」 (Schon,1983) と定義。

研究の目的

本研究の問題意識と研究における新規性は下記の通りである。

研究の問題意識

デンマークと日本で社会構造が異なる際に、フォルケホイスコーレのような「社会人のキャリア形成を支援する学校」を日本につくれるのだろうか？

既存の研究の限界

既存の研究は、創設者であるN.F.グルントヴィの哲学や北欧での価値について焦点を当てたものが多く、北欧のフォルケホイスコーレのモデルを提唱のみで日本にそのまま適応するのは難しい。

本研究の目的

北海道・東川町でのフォルケホイスコーレモデルの実践研究を通して、「地域コミュニティにおける社会人¹のキャリア²形成を支援する学校」の実現の可否を明らかにする。

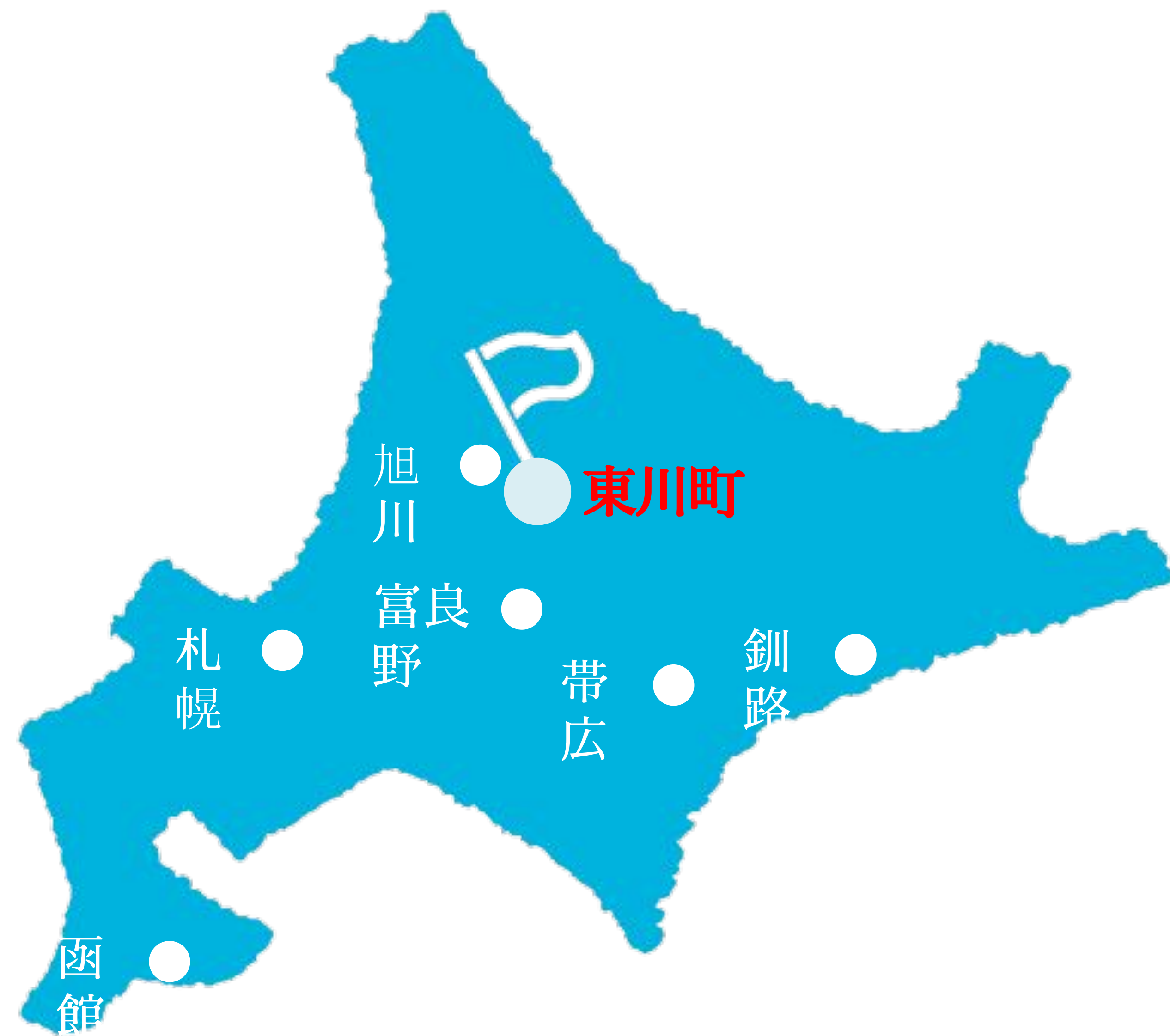
¹ 社会人:職に就いている者,すなわち給料,賃金,報酬,その他の経常的な収入を目的とする仕事に就いている者.ただし、企業等を退職した者,主婦,及び職に就く意思のある人(離職者・学生)も含む.

² キャリア:生涯を通しての人間の生き方・表現であり,自分と社会との関係を見出していく連なりや積み重ね

リサーチデザイン

実践フィールド:北海道・東川町

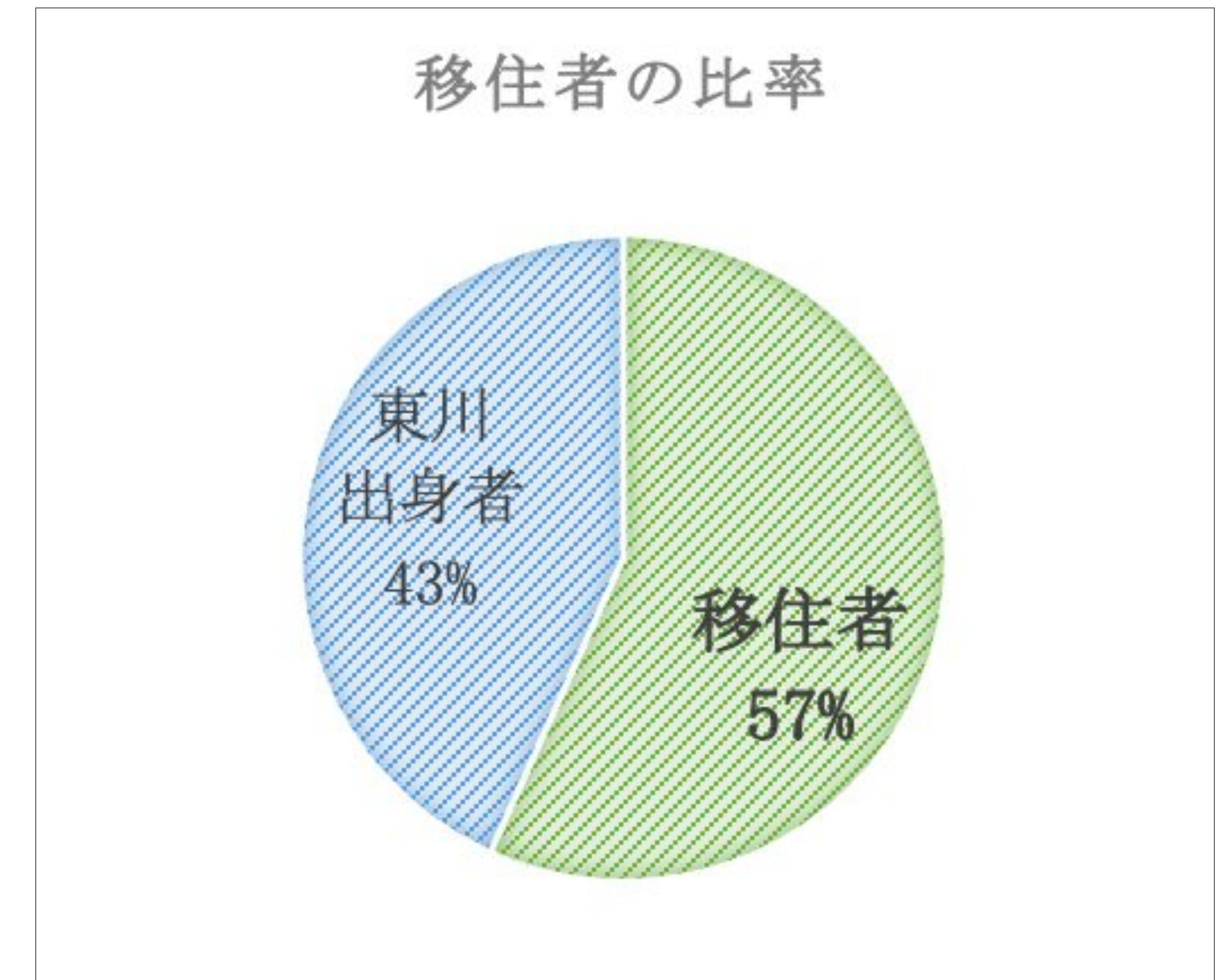
本研究は人口8600人という規模の顔と顔が見える地域コミュニティを実践フィールドとして選択をした。
人口の半分以上は移住者という、外の人(よそ者)にもオープンな風土を持つ町である。



北海道の真ん中に位置
-旭川空港から車で10分



25年間ゆるやかに人口が増加している
-人口8600人の小さな顔が見えるコミュニティ



人口の半数以上が移住者
-よそ者にオープンな風土を持つ

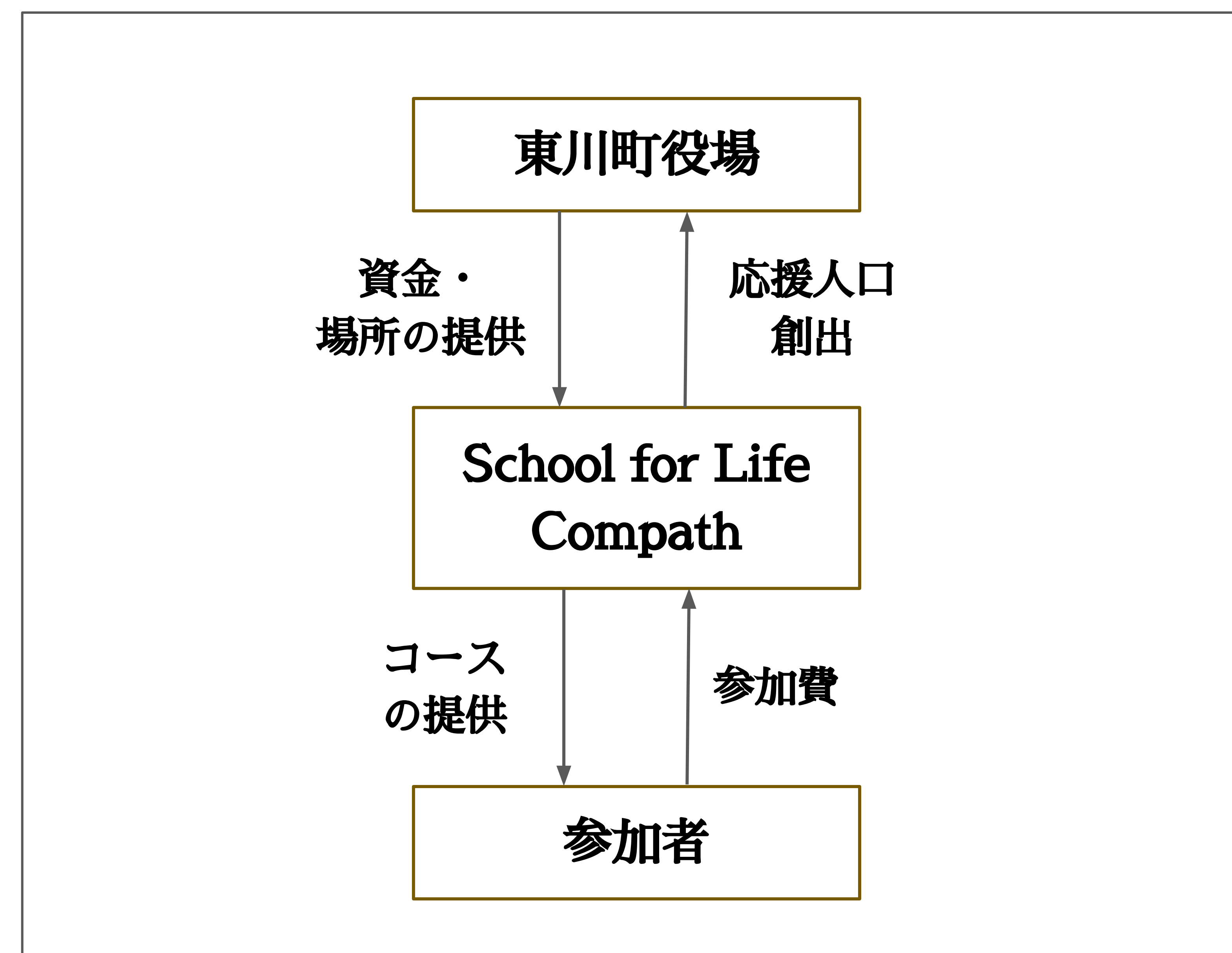
実践研究の対象：社会人のキャリア形成を支援する学校『Compath』

実践対象のCompathは、行政と連携をしている日本で唯一のフォルケホイスコーレをモデルとした学校である。

3年間のパイロット資金を元に、地域コミュニティにおける「社会人のキャリア形成を支援する学校」の確立を目指す。

School for Life Compath

- 北海道・東川町を拠点に活動
- フォルケホイスコーレをモデルとしている
- プログラムの対象は18歳以上の社会人
- 対話を軸とした省察的なプログラムを提供
- 正規のスタッフは2名
- 東川町役場から資金提供を受けている



東川との連携体制

(筆者作成)

検証する内容

本研究においては、研究の目的を明らかにするために、下記の4つ項目について実践を通して検証を実施する。

本研究の目的

「地域コミュニティにおける社会人のキャリア形成を支援する学校」の実現の可否を明らかにする。

検証①: 日本人に対して、省察的なプログラムの実装は可能なのか?

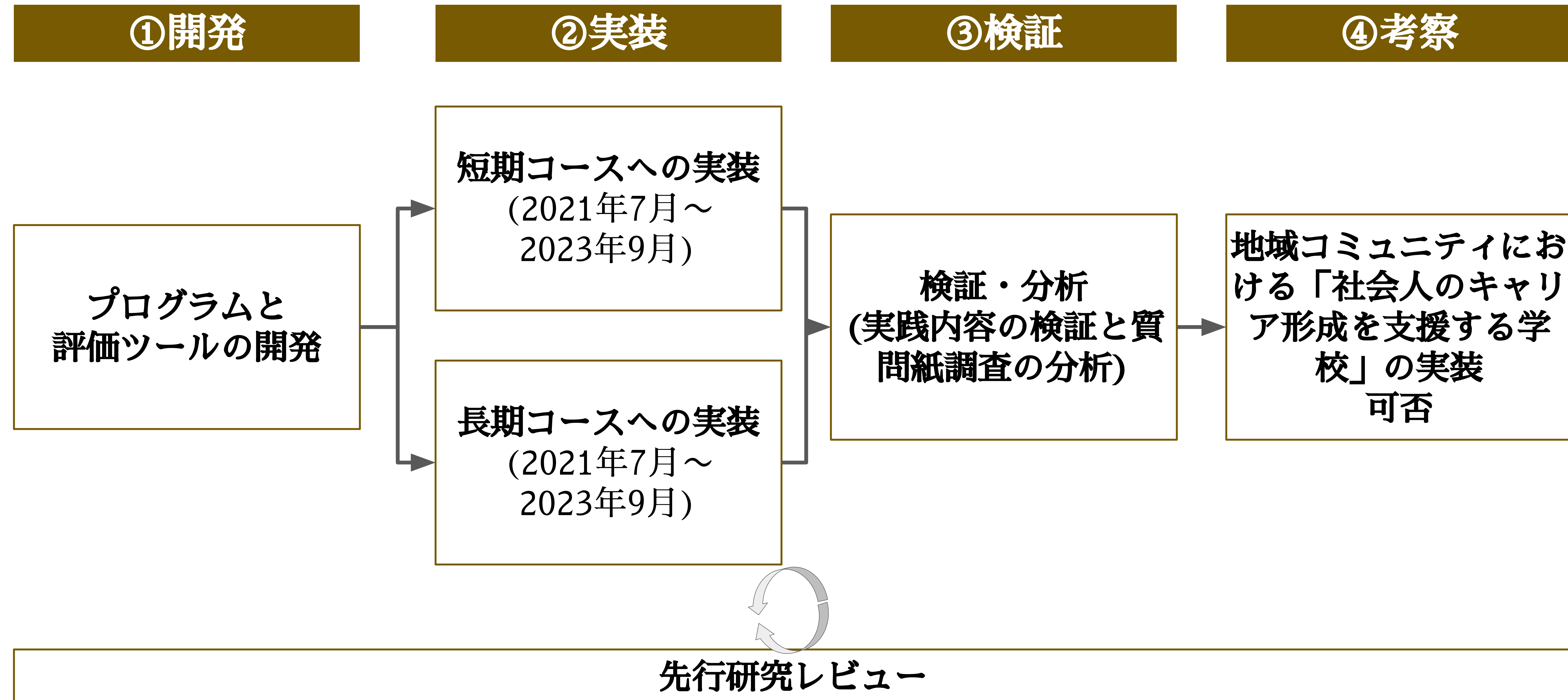
検証②: 省察を基盤としたプログラムを通じて、個人の価値観や目的は明確になるのか?

検証③: 地域コミュニティでの生活体験や地域住民の声を聞くことを通じて、個人と社会の関係性に変化は見られるのか?

検証④: 限られたリソース(人・物・金)の中で、持続的な運営体制を作ることはできるのか?

研究のプロセス

本研究は、「①開発」、「②実装」、「③検証」、「④考察」という4つのプロセスで研究を進めた。



① プログラムと評価ツールの開発

社会人の発達段階に関する先行研究レビュー

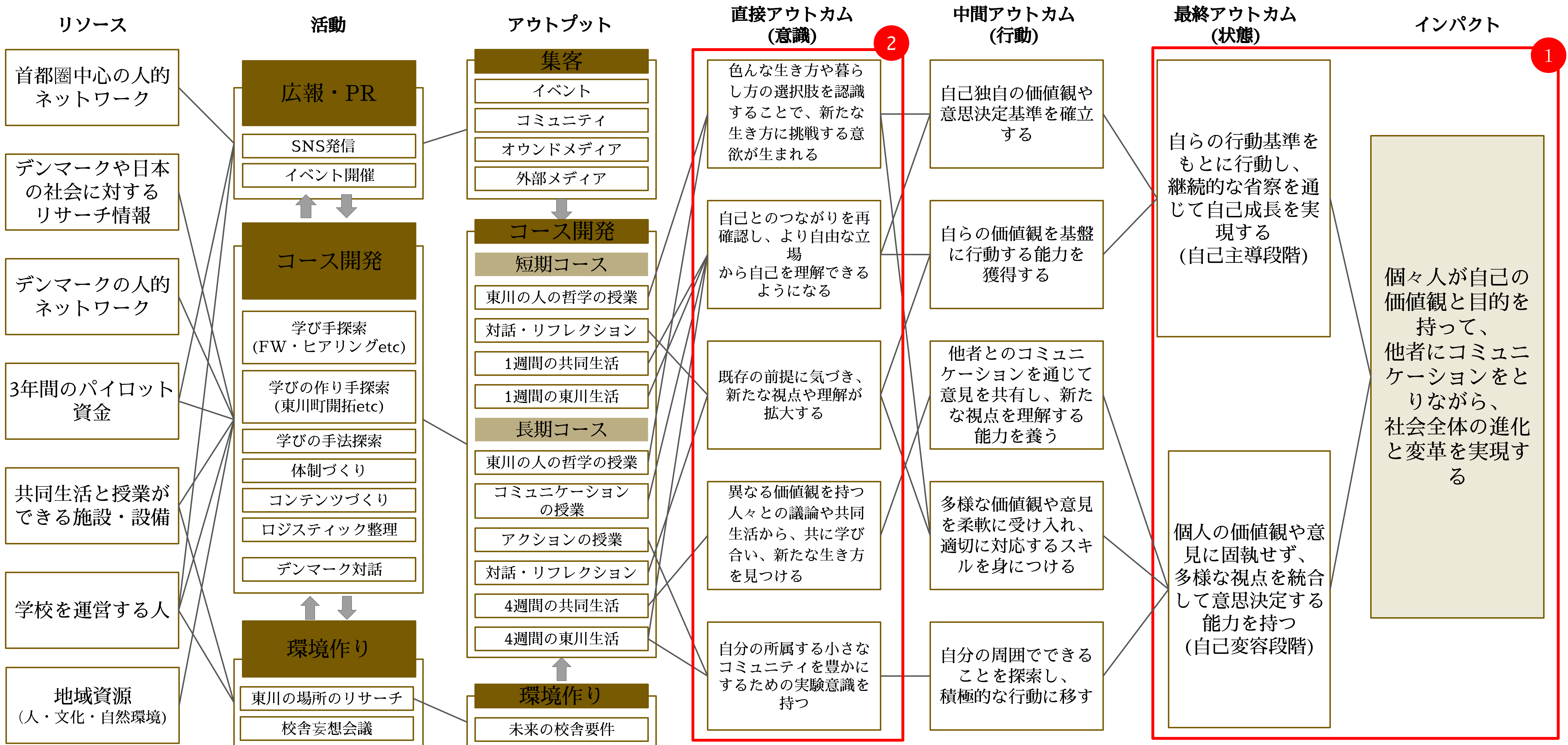
プログラムの目指すべき方向性を決めるために、成人発達の心理学者であるKegan (1994) の成人発達段階のモデルに参考にした。Compathのプログラムとして目指すべき社会人の発達段階は「自己変容・相互発達段階」とした。

発達段階	発達段階の状態
第1段階: 具体的思考段階 (0%)	全ての成人は基本的にはこの段階を超えているとされている
第2段階: 道具主義的段階 (10%)	自分の関心や欲求を満たすことに焦点を当てており, 他者の感情や思考を理解したり, 他者の視点に立ったりすることができない状態
第3段階: 他者依存段階 (70%)	自分自身の基準を持っておらず, 所属する組織のルールや上司の指示で従う傾向がある。つまり, 自分の行動が他者(組織や社会を含む)の基準によって規定されている状態
第4段階: 自己主導段階 (20%)	<u>自分独自の価値観や意思決定基準を設定することができる状態</u>
第5段階: 自己変容・相互発達段階 (1% 未満)	<u>自分の価値観や意見に固執せず, 多様な価値観や意見を受け入れながらも, 的確に意思決定ができる状態</u>

※ (成人の割合)

成人発達段階
(Kegan, 1994を元に筆者が作成)

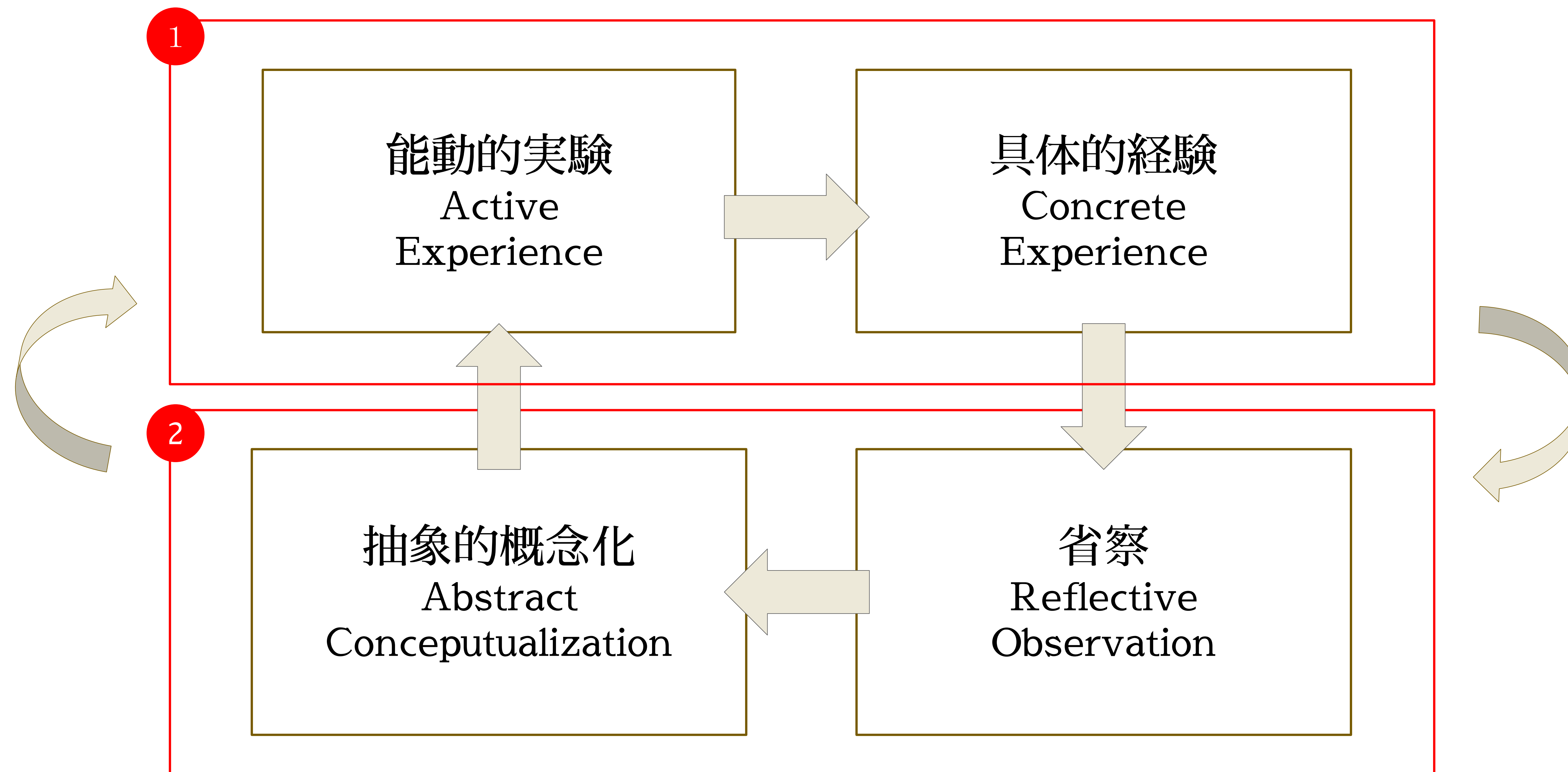
プログラムのアウトカムを整理するためのロジックモデルを検討した。①Keganの成人発達段階をもとに、最終アウトカムとインパクトを定義し、②そこから直接アウトカムを設定した。これをもとにプログラムを通じた社会人の意識の変化を評価する。



学びのモデル開発のために参照した「経験学習モデル」

学びのモデルを検討するために、Kolb (1984) の経験学習モデルを参考に学びのモデルを参考にした。「能動的実験・具体的経験」と「省察・抽象的概念化」という2つのモードを循環させることで、知識が創造され、学習が生起されることがわかった。

(Jarvis,1995)。

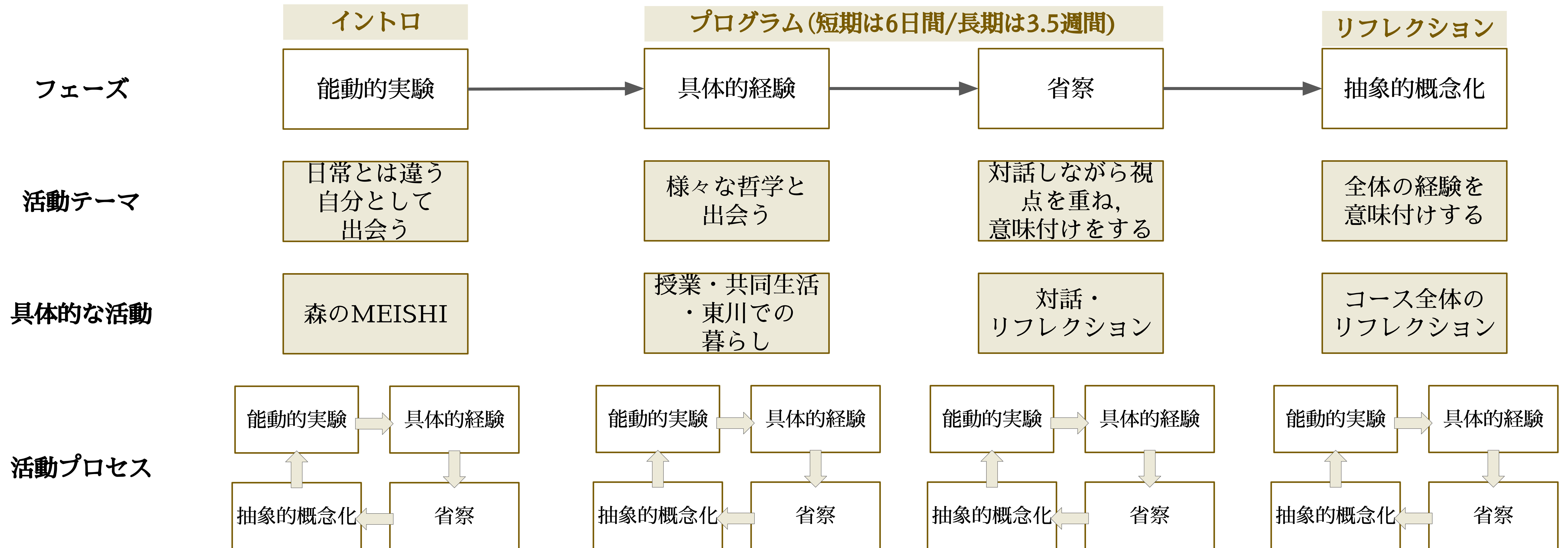


経験学習モデル

(Kolb,1984とJarvis 1995をもとに筆者作成)

コース期間中のプログラムの流れ

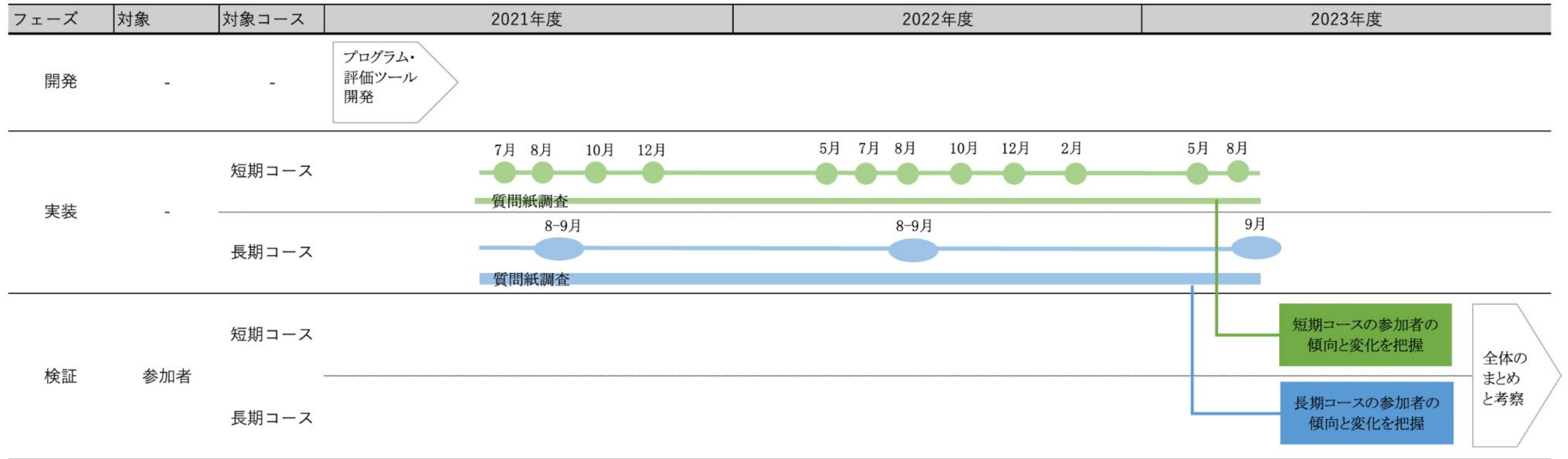
経験学習モデルをプログラムに適応した。「日常とは違う自分と出会う」場を設計し、肩書きを手放す。そこから様々な哲学と出会い、対話をしながら視点を重ね意味付けをしながら、最後統合的に経験を意味付けをするという流れにした。



②プログラムの実装

プログラムの実装の全体像

デンマークのフォルケホイスコーレでは1-2週間の短期コースと4ヶ月の長期コースが基本となっている。日本の場合は、休暇をとるハードルが高いことも考慮し、1週間の短期コースと1ヶ月の長期コースの実装を試みた。



短期コースの実装 - スケジュール -

- 実装期間: 2021年7月から2023年9月まで
- コース実施回数 12回 参加人数 154名 (参加費 11万円+宿泊費3万円)

年度	番号	コース名	日数	参加人数
2021年度	1	2021年7月のワーケーションコース	7泊8日	9名
	2	2021年8月のワーケーションコース	7泊8日	12名
	3	2021年12月のワーケーションコース	7泊8日	15名
	4	2022年2月のワーケーションコース	7泊8日	10名
2022年度	5	2022年5月のワーケーションコース	7泊8日	15名
	6	2022年7月のワーケーションコース	7泊8日	12名
	7	2022年8月のワーケーションコース	7泊8日	15名
	8	2022年10月のワーケーションコース	7泊8日	15名
	9	2022年12月のワーケーションコース	7泊8日	13名
	10	2023年2月のワーケーションコース	7泊8日	12名
2023年度	11	2023年5月のワーケーションコース	7泊8日	11名
	12	2023年8月のワーケーションコース	7泊8日	15名

告知方法



短期コースの実装 - プログラムの内容 -

時間割例

	10/15 SUN	16 MON	17 TUE	18 WED	19 THU	20 FRI	21 SAT	22 SUN
7								
8		朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食
9		朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	移動	移動
10	9:30 旭川空港集合			移動	移動			
11	森の MEISHI			【選択】暮らしの中でみみをすます	【選択】秋の大自然に耳を傾ける			8日間の振り返り
12							からだの中うたを聞く詩の授業	
13								
14	ランチ							13:00頃 解散
15	8日間のビジョンづくり							
16								
17							移動	
18	夕食	夕食	ご飯づくり	リフレクション	ご飯づくり	リフレクション	ご飯づくり	
19		移動						
20		【選択】夜の森でみみをすます	夕食		夕食			
21			リフレクション		リフレクション		最後の晚餐	

メインプログラム
 任意参加のプログラム
 余白時間 (ワークや観光など)

※ タイムスケジュールは、2023年8月時点のイメージです。プログラム内容や時間割は、現在調整中のため、変更になる可能性があります

時間割例

授業	教養		
	コミュニケーション	東川町の実践者による体験型授業(例:パーマカルチャー)	
対話・リフレクション	アクション		
	朝の会	ジャーナリングしたり、色んな方法で個人、グループで振り返る	
共同生活	夜の振り返り		
	食事	誰かと共に衣食住をともにする。	
余白の時間	ハウスマーケティング		
	地域の人との交流	8600人の小さな町で暮らしてみる	
	自然環境との関わり		

特徴としては余白が多いこと。参加者が参加しやすいように平日はリモートワークもOKに。

長期コースの実装 - スケジュール -

- 実装期間: 2021年8月から2023年9月まで
- コース実施回数 3回 参加人数 24名
(参加費 25万円+宿泊費3万円)

年度	番号	コース名	日数	参加人数
2021年度	1	2021年8月-9月ミドルコース	4週間	7名
2022年度	2	2022年8月-9月ミドルコース	4週間	13名
2023年度	3	2023年9月ミドルコース	4週間	4名

告知方法

note発信



【満員御礼】2022 夏のミドルコース～Journey to Sustainability～(2022.8.29-9.23)

♡ 46
School For Life Compath@北海道東川町
2022年4月21日 16:34

プレスリリース

「ふる」として「人生の学校」。2022年

今回のテーマは「Journey to Sustainability」。自然と人間のサステナブルな共生の仕方を考える
2022.06.16 11:00



北海道東川町では、町所属の地域おこし協力隊2名が起業し、デンマーク発祥のフォルケホイスコーレをモデルにした学び舎「School for Life Compath」を2020年7月から運営しています。10代～60代まで、様々な背景を持つ人々が全国から集まり、町の自然や人の関わりの中で、自分と社会について深く考えるコースを複数開いています。昨年に引き続き、2022年8月29日～9月23日に約4週間のミドルコースを開講。現在、参加者を募集しています。



SNS拡散



個別相談会



長期コースの実装 - プログラムの内容 -

時間割例

月	火	水	木	金	土	日
	8/24	8/25	8/26	8/27	8/28	8/29
	オリエンテーション		D A	B B	東川ツアー	
8/30	8/31	9/1	9/2	9/3	9/4	9/5
A A	A B	C	D A	B B		
9/6	9/7	9/8	9/9	9/10	9/11	9/12
A A	A B	C	D A	B B		
9/13	9/14	9/15	9/16	9/17	9/18	9/19
A A	A B	C	D A	緩じる時間		
9/20						
緩じる時間						

- A ... 「豊かさとは何か（自己編）」自己にとっての豊かさとは何かを対話する時間（町外から講師招聘予定）
- B ... 「豊かさとは何か（社会編）」社会にとっての豊かさとは何かを対話する時間（町外から講師招聘予定）
- C ... 「ひがしかわワークショップ」東川町の講師を招いて、旭岳トレッキング・草木染め・木のスプーン製作など
- D ... 「ひがしかわダイアログ」東川町で生業を営む方々と、まちづくり・環境・暮らしについてダイアログ

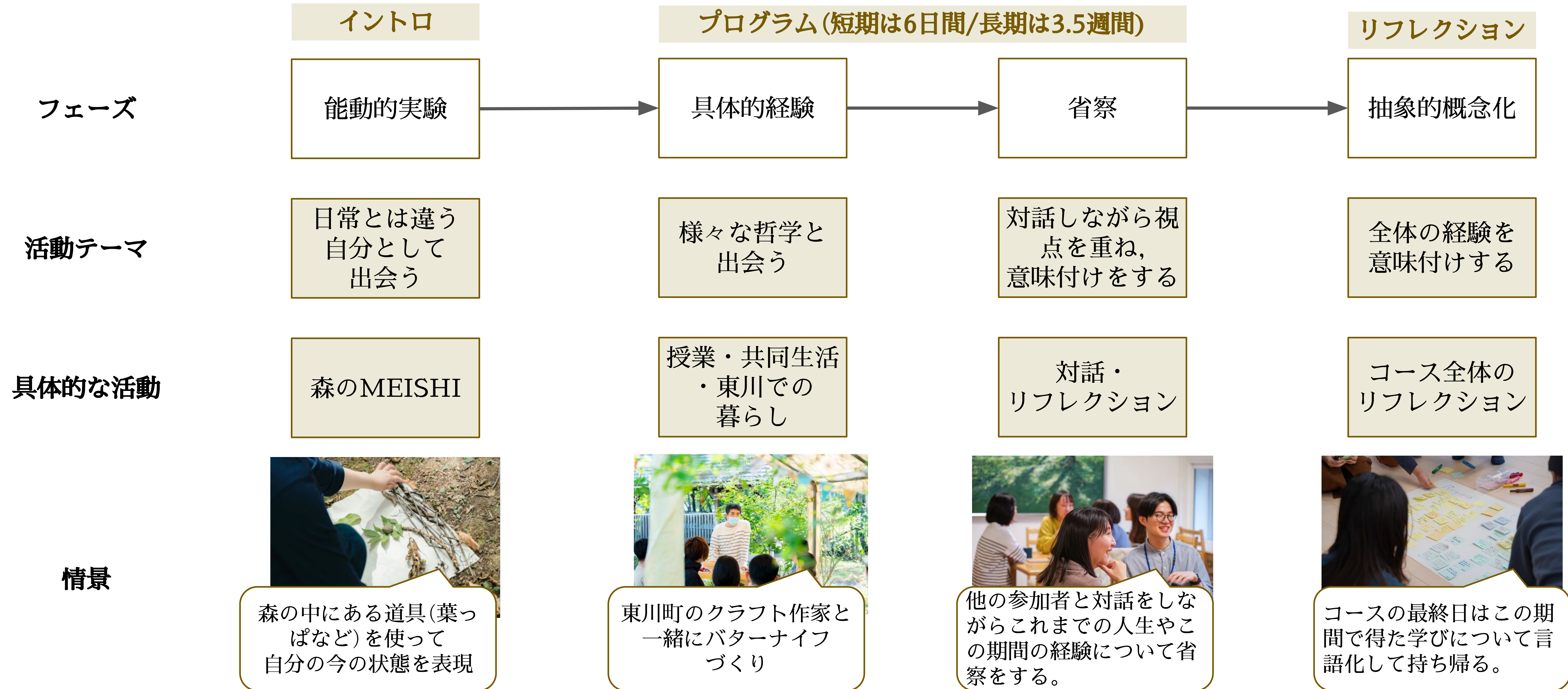
コースの要素

授業	教養	 <p>東川町の実践者による体験型授業(例:パーマカルチャー)</p>
	コミュニケーション	
	アクション	
対話・リフレクション	朝の会	 <p>ジャーナリングしたり、色んな方法で個人、グループで振り返る</p>
	夜の振り返り	
共同生活	食事	 <p>誰かと共に衣食住をともにする。</p>
	ハウスミーティング	
東川での暮らし	地域の人との交流	 <p>8600人の小さな町で暮らしてみる</p>
	自然環境との関わり	

特徴は生活する時間が長いこと。人間や環境のいろんな側面に触れることになる。

両コースの具体的なプログラムの内容

東川町の人・自然環境・文化などの資源を生かした形でプログラムを展開することができた。



③ 検証と考察

検証内容

検証項目と方法は下記の通りである。4つの検証項目を実践内容の検証と質問紙調査の分析で検証した。

検証項目		検証方法	研究対象	分析方法	回答数
検証①	日本人に対して省察的なプログラムは実装可能なのか？	実践内容の検証	Compathの短期コースと長期コースの参加者	-	-
検証②	省察を基盤としてプログラムを通して、個人の価値観や目的は明確になるのか？	質問紙調査の分析	Compathの短期コースと長期コースの参加者	KH-Coderの計量分析(樋口,2004) ¹	短期コース 139人/154人(90.26%) 長期コース 22人/24人(91.67%)
検証③	地域コミュニティでの生活体験や地域住民の声を聞くことを通じて、個人と社会の関係性に変化は見られるのか？	質問紙調査の分析	Compathの短期コースと長期コースの参加者	KH-Coderの計量分析(樋口,2004) ¹	短期コース 139人/154人(90.26%) 長期コース 22人/24人(91.67%)
検証④	限られたリソース(金・物・人)野中で、持続的な運営体制をつくることはできるのか？	実践内容の検証	Compathの短期コースと長期コースの卒業生	-	-

検証①:日本人に対して、省察的なプログラムの実装は可能なのか?

前提として、短期コースと長期コースの参加属性やニーズは下記の通りであった。

短期コース



20-30代女性
(全体の5分の4)



関東在住
(全体の5分の3)



職についている
(全体の5分の4)

きっかけとしては、「友人からのおすすめ」、
「転職など人生の転機のタイミング」、「フォルケに
興味がある」という人が多かった。

長期コース



20代女性
(全体の5分の4)



地方在住者
(全体の5分の3)

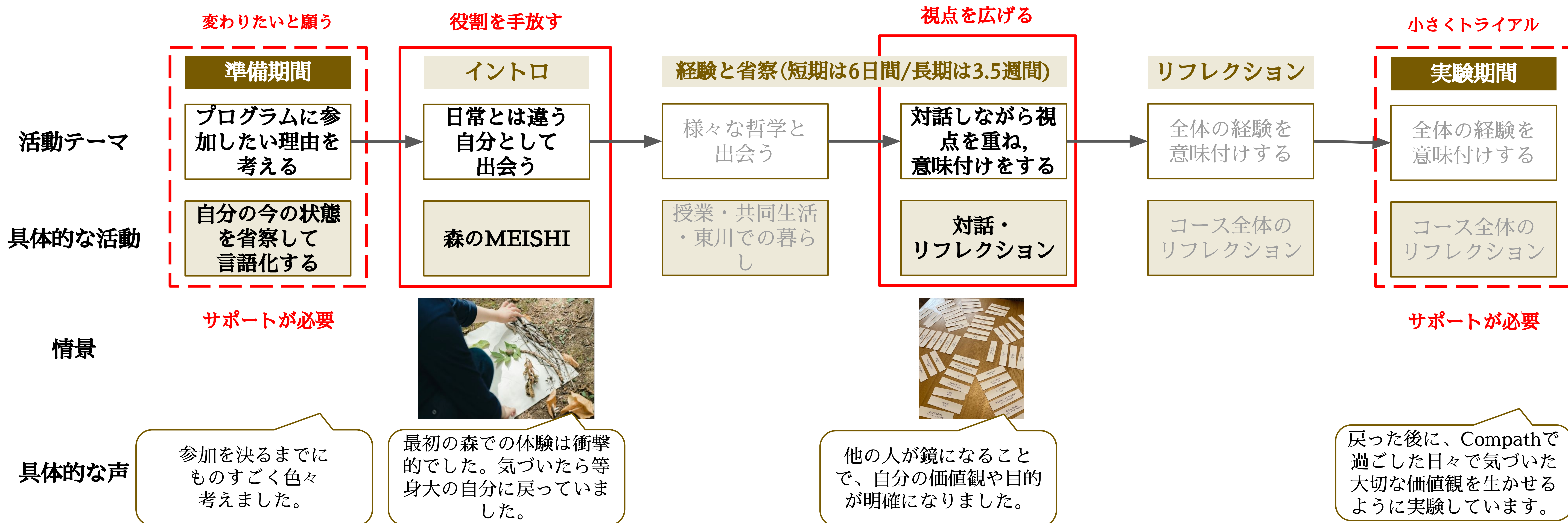


職についていない
(全体の5分の4)

4週間の長期コースに参加できるのは長期休暇のある大
学生か離職中の人メインであった。
経済的な負担がハードルとしては上がっていた。

検証①: 日本人に対して、省察的なプログラムの実装は可能なのか?

- 日本人に対しての省察的なプログラムの実装は可能と言える。日本人が省察をする上でキーとなるのは「役割から解放されること」と「ツールなどを使って対話の補助線を引くこと」であることがわかった。
- さらに日本の場合はプログラムに参加すること自体のハードルが高いため、参加を決めるプロセス自体が学びに向かうための準備期間に位置付けられることがわかった。参加後も元のコミュニティで実験し続けるためのサポートは必要。



検証②省察を基盤としたプログラムを通じて、 個人の価値観や目的は明確になるのか？

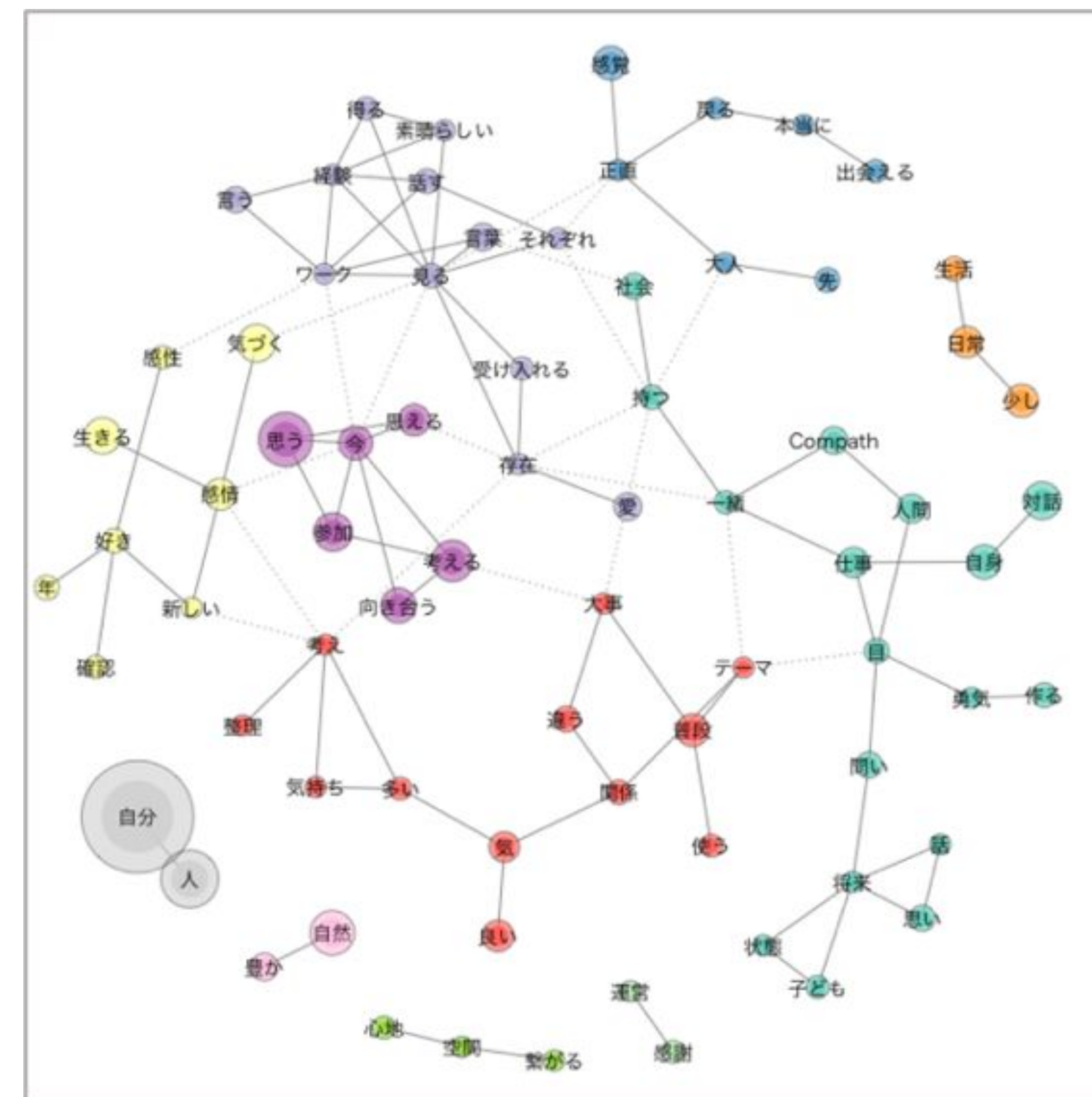
「あなたにとってどんな8日間/4週間だったか？」の記述回答をKH-coder(樋口,2004)で計量分析した。まず、短期と長期コースで特徴語の比較をしたところ「自分」という言葉が両コースとも多いことがわかった。さらに、短期は「気づく・対話」であったり、「向き合う・たくさん」という自分に省察の対象が向いている言葉が多いが、長期は「社会・他者」など外側にも意識が向いていた。その点に注目をして共起ネットワーク分析で意識の変化をカテゴリ別に整理した。

短期コース				長期コース			
順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数
1	自分	名詞	158	1	自分	名詞	31
2	時間	名詞	46	2	人	名詞	11
3	人	名詞	41	3	時間	名詞	10
4	感じる	動詞	40	4	社会	名詞	9
5	思う	動詞	36	5	思う	動詞	8
6	心	名詞	28	5	週間	名詞	8
6	人生	名詞	25	5	生活	名詞	8
8	自然	名詞	24	7	感じる	動詞	7
9	過ごす	動詞	21	8	心	名詞	6
9	考える	動詞	21	8	他者	名詞	6
11	日々	副詞	19	9	感覚	名詞	5
12	参加	名詞	18	9	環境	名詞	5
3	気づく	動詞	17	9	関係	名詞	5
3	対話	名詞	17	9	考える	動詞	5
15	生きる	動詞	16	12	今	副詞	4
16	向き合う	動詞	15	12	参加	名詞	4
17	たくさん	形容動詞	14	12	自然	名詞	4
17	感覚	名詞	14	12	出る	動詞	4
17	今	名詞	14	12	人生	名詞	4
17	自身	名詞	14	12	生きる	動詞	4
17	大切	形容動詞	14	12	豊か	形容動詞	4
22	少し	副詞	13	12	立ち止まる	動詞	4
22	普段	形容動詞	13				

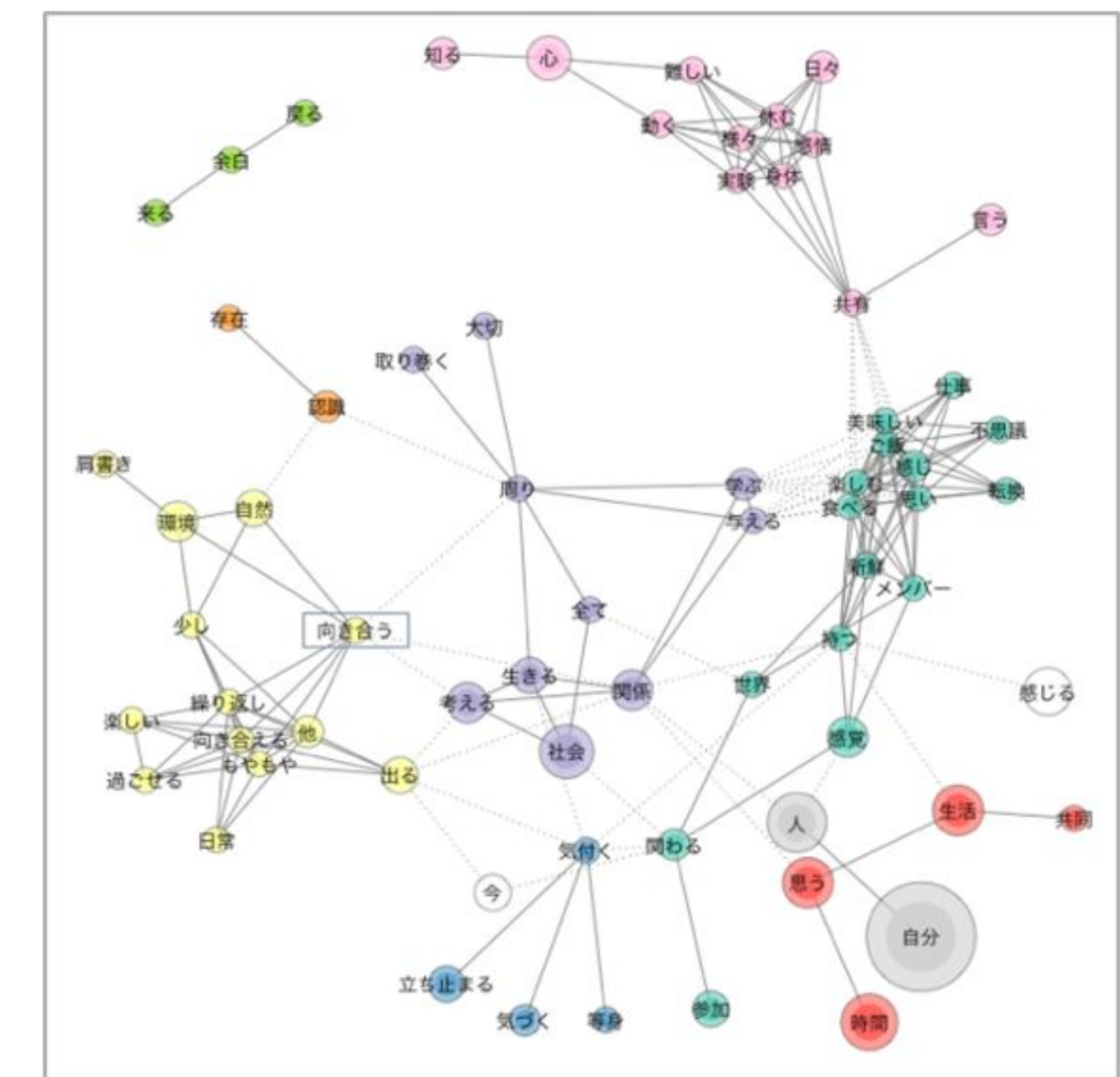
* 塗りつぶし：そのグループのみに抽出された語

特徴語の比較

短期コース



長期コース



共起ネットワーク分析

リソース

活動

アウトプット

直接アウトカム (意識)

中間アウトカム (行動)

最終アウトカム (状態)

インパクト

首都圏中心の人的ネットワーク

デンマークや日本の社会に対するリサーチ情報

デンマークの人的ネットワーク

3年間のパイロット資金

共同生活と授業ができる施設・設備

学校を運営する人

地域資源 (人・文化・自然環境)

広報・PR

SNS発信

イベント開催

コース開発

学び手探索 (FW・ヒアリングetc)

学びの作り手探索 (東川町開拓etc)

学びの手法探索

体制づくり

コンテンツづくり

ロジスティック整理

デンマーク対話

環境作り

東川の場所のリサーチ

校舎妄想会議

集客

イベント

コミュニティ

オウンドメディア

外部メディア

コース開発

短期コース

東川の人の哲学の授業

対話・リフレクション

1週間の共同生活

1週間の東川生活

長期コース

東川の人の哲学の授業

コミュニケーションの授業

アクションの授業

対話・リフレクション

4週間の共同生活

4週間の東川生活

環境作り

未来の校舎要件

1 自己とのつながりを再確認し、より自由な立場から自己を理解できるようになる

2 人の個性の豊かさに気づく。かけがえのない仲間ができたと感じる

3 異なる価値観を持つ人々との議論や共同生活から、共に学び合い、新たな生き方を見つける

地域社会での経験により、自己と社会の距離感が近づくように感じる

自己独自の価値観や意思決定基準を確立する

自らの価値観を基盤に行動する能力を獲得する

他者とのコミュニケーションを通じて意見を共有し、新たな視点を理解する能力を養う

多様な価値観や意見を柔軟に受け入れ、適切に対応するスキルを身につける

自分の周囲でできることを探索し、積極的な行動に移す

自らの行動基準をもとに行動し、継続的な省察を通じて自己成長を実現する

個人の価値観や意見に固執せず、多様な視点を統合して意思決定する能力を持つ

自己の行動が周囲の環境に及ぼす影響を考慮し、積極的に行動し続ける

個々人が自己の価値観と目的を持って、社会に積極的に貢献することで、社会全体の進化と変革を実現する

- 1 自己の捉え方の変化
- 2 他者との関係性の変化
- 3 社会との関係性の変化

検証②省察を基盤としたプログラムを通じて、 個人の価値観や目的は明確になるのか？

▼意図通り起こったこと

- コース期間中に経験学習を循環させることで、「自己の価値観や目的を形成する」という目的は達成されたと言える。価値観や目的を形成するためには、様々な体験の中で、評価をされない環境で、他者と共に対話を通して省察することが重要となる。

▼予想外の発見だったこと

- 意識の変化はプログラムのコンテンツ(授業)以上に、何気ない生活の中での他の参加者との対話や東川町の人との交流から受ける影響が大きかった。コンテンツ型ではなくコミュニティ型の学校であることが理解された。そのため、コンテンツを詰め込みすぎず、偶発性を引き出す「余白の要素」が重要となる。
- 「役割から離れて自己開示ができるつながり」ができたことへの喜びや感謝の声がたくさん見られた。コース終了後も自主的な集まりが頻繁に起こっている。社会人になってから「かけがえのない仲間ができる」ことがこのプログラムの価値と言える。

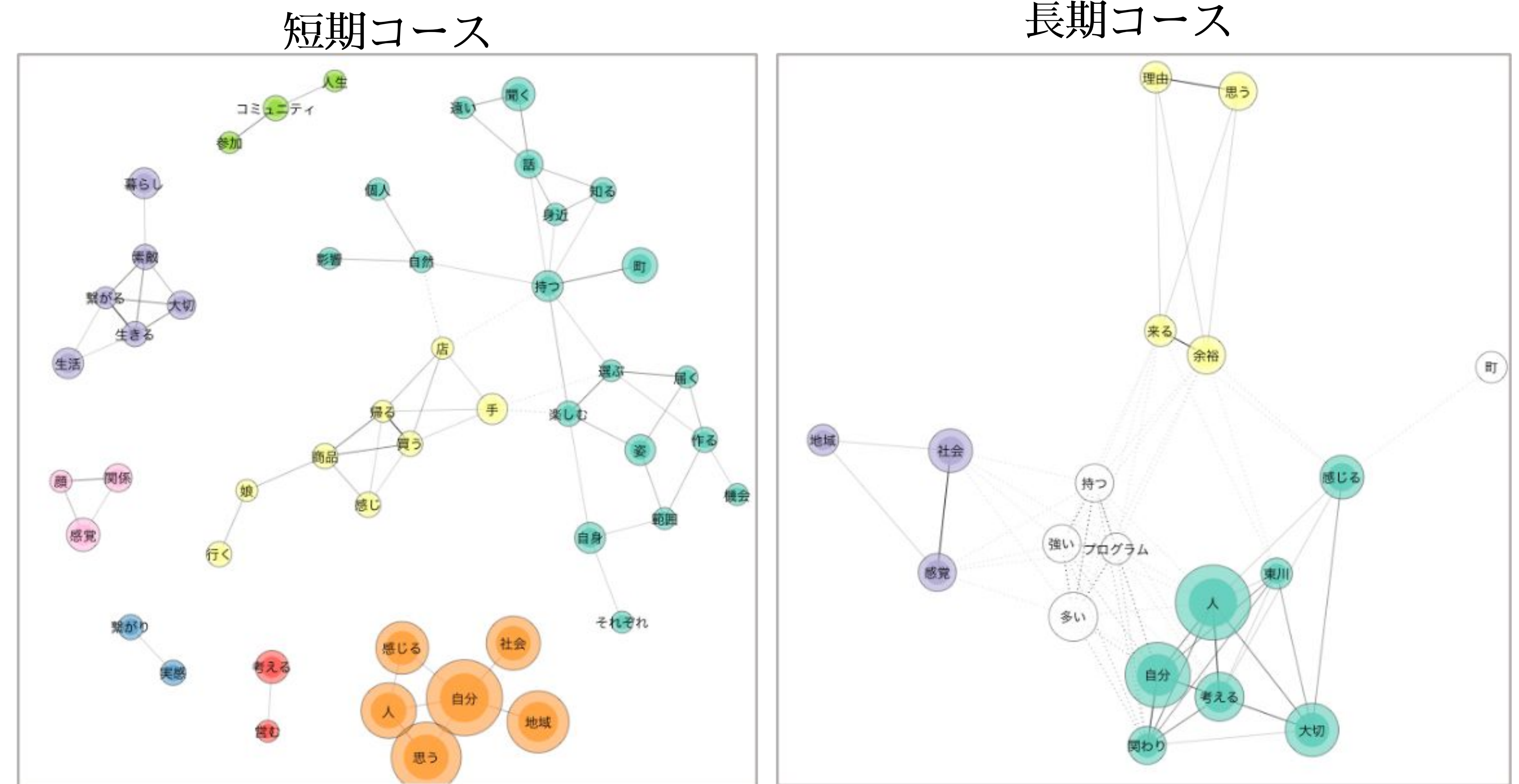
検証③: 地域コミュニティでの生活体験や地域住民の声を聞くことを通じて、個人と社会の関係性に変化は見られるのか？

「地域社会で暮らしてみることで地域に住む人の話を聞くことを通じて、社会と自分との距離や関わり方について捉え方が変わった体験はありましたか？」の記述回答をKH-coder(樋口,2004)で計量分析した。短期と長期コースで特徴語の比較をしたところ短期コースは「東川」が一番出現回数が多く、長期コースは「人」が多かった。短期コースは東川という町全体からの影響を大きく受けていたと言える。一方で長期コースは「東川の人」から影響を受けていることがみえてきた。滞在期間が長い分より「町」から「人のつながり」に変わり東川の人と深い関係が構築されたといえる。それらに注目をして共起ネットワーク分析を要因を分類した。

短期コース				長期コース			
順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数
1	東川	地名	39	1	人	名詞	12
2	自分	名詞	38	2	自分	名詞	9
3	思う	動詞	32	3	大切	形容動詞	6
4	お話	名詞	25	4	考える	動詞	5
5	地域	名詞	19	4	多い	形容詞	5
6	人	名詞	18	6	感じる	動詞	4
7	社会	名詞	10	6	社会	名詞	4
8	感じる	動詞	8	8	感覚	名詞	3
8	距離	名詞	8	8	関わり	名詞	3
8	住む	名詞	8	8	強い	形容詞	3
8	町	名詞	8	8	思う	動詞	3
12	感覚	名詞	7	8	持つ	動詞	3
12	考える	動詞	7	8	余裕	名詞	3
12	聞く	動詞	7	14	プログラム	名詞	2
12	方々	名詞	7	14	地域	動詞	2
16	姿	名詞	6	14	町	名詞	2
16	持つ	動詞	6	14	東川	地名	2
16	自身	名詞	6	14	来る	動詞	2
16	手	名詞	6	14	理由	名詞	2
16	生活	名詞	6				
16	大事	形容動詞	6				
16	暮らし	名詞	6				

* 塗りつぶし: そのグループのみに抽出された語

特徴語の比較



共起ネットワーク分析

検証③: 地域コミュニティでの生活体験や地域住民の声を聞くことを通じて、個人と社会の関係性に変化は見られるのか？

- 地域コミュニティでの経験によって、個人と社会との関係性に変化は起こると言える。ただし、その影響を感じるためには一定の経験量が必要である。(長期コースの人たちのほうが変化が大きくみられた。)
- 地域コミュニティで生活をする中で、社会は大きな抽象的なものではなく、顔の見える人々とのつながりであり、自分自身とのつながりであるという認識の変化が見られた。一方で具体的なアクションまではいかなかった。
- 具体的に影響を及ぼす要因としては下記の5つがあげられていた。



地域の人
の考え方に
触れる



地域の人
が見ている
世界を身
体的に体
感する



自分がコ
ミュニ
ティの一
員であ
るとい
うこと
を認
知する



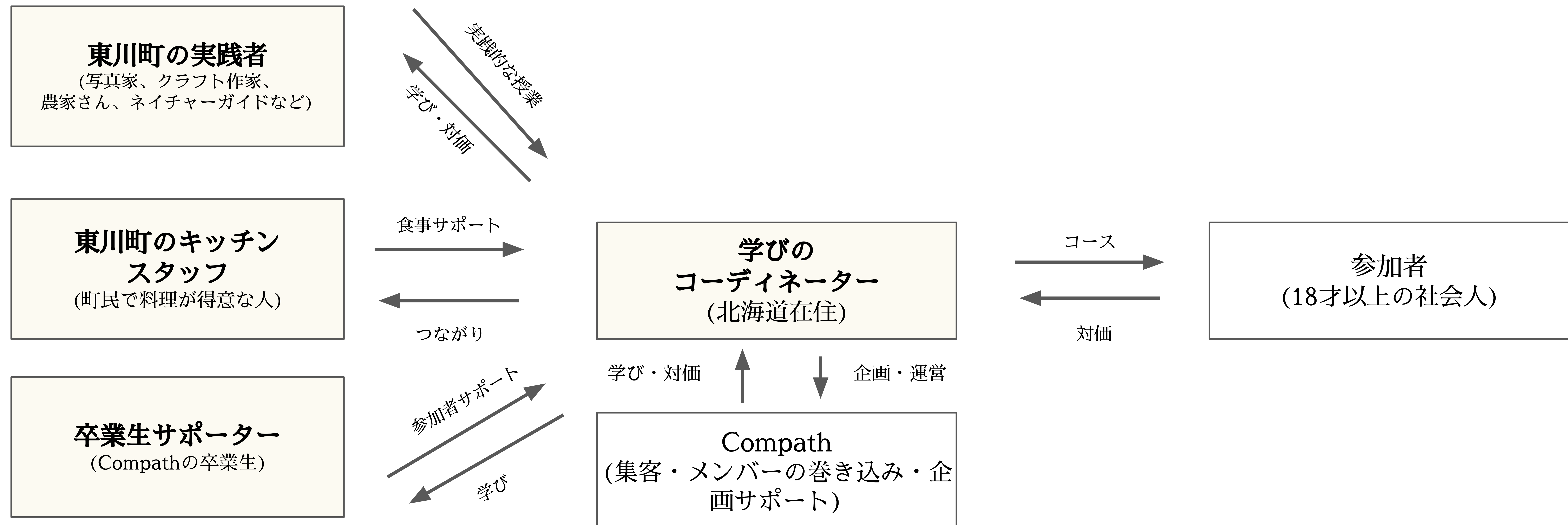
他の地
域と比
較をす
る



地域コ
ミュニ
ティで
小さ
な実
験を
繰
り返
す

検証④: 限られたリソース(人・物・金)の中で、 持続的な運営体制を作ることはできるのか？

- コミュニティ・ソリューション¹という形を採用すれば、持続的な運営体制をつくることができることが分かった。
- 学びのコーディネーターとしては北海道在住のCompathのような学校をつくることに共感する人を巻き込み、授業の先生は東川町に住む実践者をお願いをし、キッチンには子育て中のお母さん方を、全体のサポートを卒業生にお願いをする形という下記の形の体制に変更をした。



¹ コミュニティソリューション: 従来の政府や市場を通じた活動に委ねる方法とは異なり, 関心と熱意を共有する人々が自発的に集まり, 知恵と力を出し合うアプローチである (金子, 1999).

④まとめ

まとめ

本研究の限界

- ①一事例のみの研究・調査対象者の量的妥当性 ②事例の当事者ということによるバイアス

研究で得られた成果

1. 自己の価値観と目的の形成を促すための省察的なプログラム(短期・長期)の実証ができた(検証1・2)
2. 自己と社会の関係性に変化を与える地域コミュニティの要因が明らかになった(検証3)
3. 持続的に運営していくことにつながるコミュニティ型の運営モデルの実証ができた(検証4)

Compathモデルの特徴

1. 学校の価値は自己のキャリア形成だけでなく、キャリア形成を支援するつながりができることである。
2. 同質性が高くなりがちな学校において地域コミュニティとの接続は重要である。
3. 学び手を作り手として巻き込みながら「共に学校をつくっていく」というコミュニティ・ソリューションが持続的な運営の方法となる。

参考文献

参考文献

- Aurthr.M.B.,Claman,P.H.,and DeFillippi,R.J. (1995) .Inteligent enterprise, intelligent career. Academy of Management Executive,9 (4) .7-20.
- Hall,D.T. (1976) .Careers in Organizations. Glenview, IL: Scott, Foresman.
- Jarvis,P. (1995) .Adult and continuing education.Routledge.
- Kolb,D.A. (1984) .Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development.Prentice Hall.
- Marshall B. Rosenberg,Deepak Chopra (2015) .Nonviolent Communication: A Language of Life: Life-Changing Tools for Healthy Relationships. PuddleDancer Press. (マーシャル・B・ローゼンバーグ著,安納献・小川 敏子監訳(2018) . NVC 人と人との関係にいのちを吹き込む法.日本経済新聞出版.)
- Paker,P.,Khapova,S.N.,and Arthur,M.B. (2007) .Dynamic career dancing:finding harmony through interdisciplinary steps.23rd EGOS Colloquium,July5-7,2007.
- Peter,Dahler-Lasen (2003) .Selvevalueringens HVIDE SEJL,Odense,Syddansk Universitetsforlag.
- Reynolds,M. (1998) .Reflection and Critical Reflection in Management Learning. Management Learning,29,183-200.
- Robert,Kegan. (1984) .In Over Our Heads.Harvard University Press.
- Ryff,C.D. (1989) Happiness is everything,or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being.Journal of Personality and Social Psychology, 57,1069-1081.
- Savickas,M.L. (2011) . Career counseling. American Psychological Association, Washington, D.C.
- Schein,E.H. (1978) . Career dynamics: Matching individual and organizational needs . Addison Wesley Publishing Company.
- Schön,Donald.Alan (1983) . The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action,NewYork: Basic Books. (ドナルド・A・ショーン著,柳沢昌一・三輪建二監訳 (2007) .省察的実践とは何か-プロフェッショナルの行為と思考-.鳳書房.)
- Super,D.E. (1957) The psychology of careers.New York:Harper&Row. (日本職業指導学会[訳](1960) .職業生活の心理学.誠信書房)
- The Association of Folk High School in Denmark (2019) .Danish Folk High School.The Association of Folk High School in Denmark.
- W.K. Kellogg Foundation (2004) .Logic Model Development Guide. W.K. Kellogg Foundation.
- 石田謙豪・平恵津子・住元しのぶ(2007) .自己評価 の活用による学校改善の実践報告,日本評価研究,7 (1) ,21-32.
- 石山恒貴,伊達洋駆(2022) .越境学習入門-組織を強くする「冒険人材」の育て方-.日本能率協会マネジメントセンター.
- 市川力,井庭崇(2022) .ジェネレーター 学びと活動の生成.学事出版.
- 今村晴彦,園田紫乃,金子郁容(2010) .コミュニティのちから— “遠慮がちな” ソーシャル・キャピタルの発見.慶応義塾大学出版会.

参考文献

- ・ 海川 能理子, 渡邊 聡 (2016). 参加型政策評価としてのロジック・モデルの意義 —東海市を事例として—. 日本地域政策研究, 16, 58-65.
- ・ 岡本 祐子 (1999). アイデンティティ論からみた生涯発達とキャリア形成, 組織科学33(2), 4-13.
- ・ 尾野 裕美 (2022). 就業者のキャリア自律と離転職意思, キャリア焦燥感との関連. 産業・組織心理学研究, 36(1), 53-63.
- ・ 鬼木英幸 (2005). 実効性のある学校評価の在り方についての一考察: 学校評価に対する教職員の主体性 形成の試み, 教育実践研究, 15, 187-192.
- ・ 片岡 亜紀子, 石山 恒貴 (2016). キャリアブレイクを経験した女性の変容 —パソコンインストラクターを対象とした実証研究—. 産業カウンセリング研究, 18(1), 9-24.
- ・ 加藤洋平 (2016). 組織も人も変わることができる！なぜ部下とうまくいかないのか-「自他変革」の発達心理学-. 日本能率協会マネジメントセンター.
- ・ 金子郁容 (1999). コミュニティ・ソリューション. 岩波書店.
- ・ 亀岡 恭昂, 喜多 恒介 (2021). ナラティブ・アイデンティティの構成を目指すワークショップの試み. 日本教育工学会論文誌, 45, 25-28.
- ・ 坂口緑, 佐藤裕紀, 原田亜紀子, 原義彦, 和気尚美 (2022). デンマーク式 生涯学習社会の仕組み. ミツイパブリッシング.
- ・ 佐藤裕紀 (2012). デンマークの生涯学習戦略に関する一考察 - 『デンマークの生涯学習戦略』における自由成人教育の戦略に着目して. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊, 19(2), 107-117.
- ・ 清水満 (1993). 生のための学校-デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界. 新評論.
- ・ 鈴木七美 (2012). デンマークにおける「障害のない社会」構想とノーマライゼーション—余暇活動としてのフォルケホイスコーレの展開. 国立民族学博物館, 102, 77-98.
- ・ 砂原 雅夫, 金 珉智 (2022). リカレント教育の歴史的変遷及び日本経済に与える影響について —高等教育機関を中心に—. 教育経済学研究, 1, 50-61.
- ・ 竹澤聡, 三上行生, JinkaiZHANG, 長松昌男, 高島昭彦, 中村香恵子 (2017). 社会人学び直し認定制度の定着に向けた同類型講座との比較と評価. 工学教育. 65(5), 32-37.
- ・ 田中茉莉子 (2017). リカレント教育を通じた人的資本の蓄積. 内閣府経済社会研究所「経済分析」, 196, 49-81.
- ・ 田渕宗孝 (2008). グロントヴィ論とフォルケホイスコーレ論の再検討. 社会文化研究, 10, 86-106.
- ・ 堂野智史 (2005). 産学連携基盤としての産学官民コミュニティの形成: INS, KNSの事例を通じて. 産業学会研究年報. 2005(20). 31-42.
- ・ 戸田 信聡 (2021). リーダーシップの使用理論はどのように形成・改訂されるのか?—X社に見るリーダーの使用理論の形成・改訂パターンと要因—. 日本労務学会誌, 22(1), 20-34.
- ・ 中原 淳 (2013). 経験学習の理論的系譜と研究動向. 日本労働研究雑誌, 55(10), 4-14.
- ・ 中村 由香 (2018). 日本型雇用システムの現状と課題. 生活協同組合研究, 514, 4.
- ・ 芳賀 (2004). 匿名的, かつ「親密」なかかわり—1.5次関係としての自己啓発セミナー. (伊藤雅之, 檜尾直樹, 弓山達也. スピリチュアリティの社会学: 現代世界の宗教性の探求. 世界思想社.)
- ・ 濱口 桂一郎 (2018). 日本型雇用システムの根本問題. 生活協同組合研究, 514, 5-12.
- ・ 早野曜子 (2021). デンマーク・オレロップ体育アカデミーと自由学園の交流(その1)-学校設立と交流の歴史-. 生活大学研究, 6(1), 118-128.

参考文献

- ・ 早野曜子(2022).デンマーク・オレロップ体育アカデミーと自由学園の交流史その2 -デンマーク留学と国際理解-.生活大学研究,7(1),45-62.
- ・ 原義彦(2019).フォルケホイスコーレの基本価値の類型化と自己評価. 秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター,41,85-96.
- ・ 原田亜紀子(2017).デンマークの若者の「民主主義の学校」での主体形成に関する考察—デンマーク若者連盟におけるハル・コックの思想に着目して—.社会教育学研究,53(1),1-12.
- ・ 樋口耕一(2017).計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望.社会学評論,68(3),334-350.
- ・ 福沢 恵子(2009).「就業を中断した高学歴女性の現状とキャリア開発の課題」：日本女子大学リカレント教育・再就職システムの事例から. 現代女性とキャリア：日本女子大学現代女性キャリア研究所紀要,1,92-108.
- ・ 藤川 恵子(2008).日本版フレキシキュリティ構築への課題 ——転職と多様な働き方を支援する労働市場政策——, 研究紀要Works Review,3(15),1-14.
- ・ 藤村好美(1997).マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成課程-ハイランダー・フォークスクールの設立とグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想-.生涯学習・社会教育学研究,21,35-45.
- ・ 藤墳 智一(1997).社会人教育の経済的構造.日本労働研究機構『大学修士課程における社会人教育』調査報告書,91.
- ・ 藤原 健祐,鈴木 哲平,椎名 希美,青木 智大,小笠原 克彦(2021). 大学におけるヘルスケア関連リカレント教育の展開—小樽商科大学ビジネススクールの取組事例—.産学連携学,17(2),76-90.
- ・ 堀井聡子,奥田博子,成木弘子,川崎千恵,大澤絵里(2018).管理立場にある自治体保健師に求められる能力獲得のためのプログラムの開発—経験学習サイクルに基づく内省型教育プログラムの概要と受講者アンケートの結果から—.保健医療科学,67(3),322-329.
- ・ 本田 由紀(2001). 社会人教育の現状と課題.高等教育研究,4,93-112.
- ・ 増田健太郎(2003).学校改善過程に関する事例研究:学校評価の分析から,教育経営学研究紀要,6,67-74.
- ・ 三好きよみ(2021).専門職大学院で学ぶ中高年社会人の学習動機と学習行動.横幹,15(1),4-12.
- ・ 森田佐知子(2019).フォルケホイスコーレの現代的意義-ノルウェイ,スウェーデン,フィンランドにおける事例を通じた比較研究-.関係性の教育学,18(1),119-136.
- ・ 森田佐知子(2023).フィンランドの若者のキャリア形成におけるフォルケホイスコーレの役割-Alternative path to universityプロジェクトに着目して-.関係性の教育学,22(1),83-96.
- ・ 文部科学省生涯学習審議会(1992).今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について(答申).
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/archive/pdf/93790601_03.pdf (参照2023-12-28).
- ・ 文部科学省(2015)「社会人の学び直しに関する現状等について」.
- ・ 文部科学省(2016)「平成27年度開かれた大学づくりに関する調査研究」.
- ・ 文部科学省(2018)「今後の社会人受入れの規模の在り方について」.
- ・ 矢野拓洋,松浦早希,松永圭世,真庭伸悟,一般社団法人IFAS(2021).フォルケホイスコーレのすすめ:デンマークの「大人の学校」に学ぶ.花伝社.
- ・ 山谷清志(1997).政策評価の理論とその展開-政府のアカウンタビリティ-.晃洋書房.
- ・ グラットン・リンダ,スコット・アンドリュー,池村千秋(訳)(2016).LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略.東洋経済新報社